

T. S. エリオットのドライデン観

批評論の背景にあるもの

村田俊一

〈序〉

T. S. Eliot には幾つかの Dryden 論があるが、最初のものは 1921 年に *Times Literary Supplement* に掲載された "John Dryden" (*Selected Essays* [1942; London: Faber and Faber, 1966], 305-316.) (以下 *SE* と略す) である。これは 1920 年、Mark Van Doren が Dryden の詩そのものの良さを追求した *The Poetry of John Dryden* (1920) の書評で、Eliot はこの中で、Dryden を 19 世紀のロマン主義的詩観への反措定として積極的に再評価し、従来の英文学史の流れの序列を組み替える一つの手段にしたのである。このような Dryden 評価の反面、Eliot は同年、この *TLS* に掲載した "The Metaphysical Poets" (1921) の中で「感性の分離」(a dissociation of sensibility) の責任を John Milton と共に Dryden に課したのである (*SE*, 287-9)。称賛に満ちた Van Doren の書評と Dryden に「感性の分離」の責任の一端を課したこの評論は、"Andrew Marvell" 論と一緒に 1924 年 *Homage to John Dryden* (London: Hogarth Press) として出版された。Eliot が「感性の分離」を悪化させた Dryden に、敢えてこの賛辞の題名 'Homage' を呈したことは、まさに Eliot の Dryden への傾倒を示すもので、モダニス・エリオットからクラッシスト・エリオットへの「改宗」とも言えるかも知れない。

このような Van Doren の流れを汲む Eliot の共感あふれる Dryden 論は、その後、Eliot 批評全体の中で余り論じられることはなかった。"Milton II" でこの「感性の分離」の責任が修正された時ですら、その原因は文学上の問題というよりは政治的宗教的な「内乱」(the Civil War)に関係付けられた。Eliot はここで、その原因を「英国だけでなく、広くヨーロッパのうちに求め」、この原因を「どこまでも掘り下げて行くな、最後には言葉も観念もきかなくなるような一つに深み(depth)」(*On Poetry and Poets*, 173, 以下 *OPP* と略す)に達してしまうと述べている。この一文は、Eliot の "The Clark Lectures" (1926) の「知性の崩壊」(the Disintegration of the Intellect)と少なからず関係して行く¹。この立場を踏まえて「感性の分離」を考えるなら、これは取りも直さず 17 世紀における「内乱」がもたらした英国国教会の危機を示すものである。このように考えるなら Eliot の Dryden 観は、拙著『T. S. Eliot のヴィア・メディア』(弘前大学出版会、2005) (以下『ヴィア・メディア』と略す)で論じた John Donne, George Herbert に見られる宗教上の個人的なアングリカニズ (Anglicanism) に起因するというより (215-250, 295-335)、この精神にある「包括性」(comprehension)²がその当時の危機に瀕し、これが「感性の分離」と言う形をとって Milton、Dryden に現れたのではないかと推測される。小論では Eliot の「感性の分離」の修正を念頭に置きながら、Dryden に焦点を合わせ Eliot の Dryden 観の根底にある考えを探ってみたい。

I

Eliot の詩人に対する毀誉褒貶、修正は Donne, Milton, G. Herbert にも見られることで、I. A. Richards の言葉を使うなら、Eliot の批評論に見られる「逆転と撤回」³である。実際、Eliot の自身の声に耳を傾けるなら、彼は 1942 年の "The Music of Poetry"の中で「以前の発言と矛盾したことを言いかねない」(*OPP*, 17)と述べていながら、その後、1956 年の "The Frontiers of Criticism"では「詩人たちに関する私の評価は、私の生涯を通じてほとんど変わっていない」(*OPP*, 118)と矛盾したことを述懐している。このような Eliot の精神的推移の糸口となるのは *The Sacred Wood* (1920)の再版に付けた 1928 年の「序文」である。この冒頭部分を見るなら Eliot の批評は、1920 年の詩の自律性の問題から 8 年を経て「詩がその時代、その他の時代の人間の精神的・社会的生活に対して持つ関係」へと変化している (*The Sacred Wood* [London: Methuen, 1950], viii. x.)。Eliot はこの再版の前年 1927 年アングロ・カトリックに改宗し、その翌年 *For Lancelot Andrewes* を出版している。この「序文」であの有名な Eliot 自身の信条—「文学においては古典主義者、政治においては王党派、宗教においてはアングロ・カトリック」—を宣言しているが、このような Eliot の文学、政治、宗教に対する精神的態度の変化は当然、文学を外部的なものとの関係で見て行くことも大切であると自覚したのかもしれない (*SE*, 388)。この外部的なものは "Tradition and the Individual Talent" (1919)に見られる「歴史感覚」(historical sense)と関係しながら、かつての Edmond Wilson, John Crowe Ransom に見られるように⁴、「歴史的」か否かという批評上の論争を生むに至ったが、Milton 批評では 1936 年の "Milton I" に見られる「独自の立場」(his own point of view)と「外部的な標準」(outside standards)に展開して行ったのである (*OPP*, 164)。Eliot が "Milton I" で彼に「反対した」のはこの第二の立場、つまり「外部的な標準」と呼ばれる普遍的な言葉の立場からである。この辺をもう少し補足するなら、Eliot が、後に "Milton I"を修正したのは、E. M. W. Tillyard があの画期的業績である *Milton* (1930) で、その当時の Milton 批判を一手に引き受け、Milton 批判者達の現代的意識の再考を求めたことに呼応したとも考えられるが、それ以上に Milton の個別性というより、この「普遍性」(universality)、つ

まり Milton の言葉が日常語との接触を断ち、簡潔にして普遍的な「共通語」の達成を意図していないという「外部的な標準」からなのであった。このような Eliot の Dryden の言葉に対する洞察は *John Dryden: The Poet, The Dramatist, The Critic* (New York: Terence & Elsa Holliday, 1932) (以下 *DPDC* と略す) の中で Dryden が「普通の英語の話言葉」(a normal English speech) (21) の確立者であると述べていることにも窺い知ることが出来る。この評論は 1930 年の *The Listener* に掲載された三つの Dryden 論に幾らかの修正が加えられて出版されたもので、これらの評論に特徴的なことは Dryden の「リズムの自由さと独創性、そして言葉の正確さと威厳」("John Dryden," *The Listener*, III. 66 [16 Apr. 1930] 688) への成長が強調されたことだった。このことは、Eliot がイタリア語の中に「共通語」を発見し、Dante の「普遍性」を求めたことに関係して行くものである (*SE*, 238-9, 252.)。この立場から見るなら、Eliot が "Milton I" で、Milton の言葉は、会話体から離れ「英語を死語のように使っている」(*OPP*, 159) と批判したのも尤もなことである。しかし、Eliot は Milton の欠点として非難したこの日常語から離れた言葉を "Milton II" では、Milton の叙事詩にはかえって「ふさわしい文体」であると逆手に取り、これを Milton の「偉大性」として弁護したのである (*OPP*, 176)。Eliot にとって "Milton II" はまさに "Milton I" の展開 ("To Criticize the Critic," *To Criticize the Critic* [London: Faber and Faber], 1965, 24-5) (以下 *TCC* と略す) なのである。

II

このような Eliot の Milton 批評の逆転は、今までの考察から察せられるように Dryden 批評にも見られる。もう少し具体的に見て行くと、Eliot は "The Metaphysical Poets" の中で、「感性の分離」の責任に関して Dryden を Milton と同列に扱ったものの、晩年 1961 年の "To Criticize the Critic" で「『感性の分離』はダンと形而上詩人に対する私の傾倒と Milton に対する反発を表すものである」(*TCC*, 9-20) と述べ、ここでは Dryden に「感性の分離」の責任を課していない。そもそも Eliot が "The Metaphysical Poets" の中で「感性の分離」の悪化を Milton と Dryden のせいにしたのは、形而上詩人たちが「精神と感情の状態に等しい言語」を見つけようとする仕事をしていたのに対して、Milton と Dryden は言葉の使い方が「驚くほど魂を無視」した「人工的なもの」(the 'artificiality') にしてしまったという理由からである (*SE*, 288-9, 290)。しかし、"Milton I" の中で「Shakespeare の使っていた生きた英語は、二つの構成要素に分裂し、その一つは Milton により、他の一つは Dryden により開発された。この両者のうちでは、Dryden の発展がより健全だったといまでも私は考えているが、それは詩における口語体の言語の伝統を、たとえわずかながらでも保存しているのが Dryden だったからである」(*OPP*, 161) という一文を見るなら、Dryden と Milton は一緒にすることは出来ない。このような Dryden 評価に至った Eliot が、「感性の分離」の責任の一端を Dryden に課したのは、多分に Dryden の *Annus Mirabilis* (1667), *The Sense of Innocence* (1677) などの序文に見られる絵画的イメジ観にあるものと思う (*Dryden of Dramatic Poesy and other Essays I* [Everyman's Library], 203) (以下 *DDPO* と略す)。しかし、この序文に見られる imagination の部分 (*DDPO* I, 97-8) は、Eliot が Dryden の詩論の中核をなすものとしてしばしば引用するところで、このような Dryden 評価を考えるなら、Eliot が「感性の分離」の責任の一端を Dryden に課したその背景には、「ただ単に文芸批評の言葉によってのみ説明するわけには行かない」(*OPP*, 173) 問題があった。

この「感性の分離」の背景を考えるに当たって、Eliot の Milton 批評に見られる「独自の立場」と「外部的な標準」の二項対立的批評を考えてみたい。この批評態度に関して、Eliot は 1929 年の "Dante" の中で、詩の自律性を重んじる非歴史的態度と、「詩の構想や、哲学や、隠された意味の理解が、詩の鑑賞にとって本質的なことである」という歴史的態度の何れの極端をも避けている (*SE*, 237-8)。このように相反する二つの両極端にある批評を避け、その中間にあるものを追い求める「中道精神」(『ヴィア・メディア』、16-7, 39-41, 239) の背景には、両極端を疑うという「懐疑主義」(scepticism)⁵があるが、Eliot にはこれを乗り越えてその融合へ向かう姿が見られる。このような考えは、既に 1923 年の "The Function of Criticism" の中で、批評の「共同の活動 (cooperative activity) の可能性」に触れ、これを「我々の外側にある何物か」で、「仮に真実と呼んでもよい」と言っている頃から念頭においている (*SE*, 34, Cf. 『ヴィア・メディア』、5-8)。

III

このような Eliot の「中道精神」は Donne, Herbert に見られる宗教上の via media の問題⁶とは違って、Dryden の場合は文字通りの「中道精神」として彼の作品に見受けられる。たとえば、四人の劇的対話の形式から成る *An Essay of Dramatic Poesy* (1668) などがその格好の例である。Eliot はこの復刻版が出た時、その序文としてこの対話形式を踏襲して "A Dialogue on Dramatic Poetry" (1928) を書いているが、Dryden はこの *Dramatic Poesy* で、ドグマを避けて何れにも徹することがなく問題を提起したままその決定を控えている。特にこの中の対話者の一人で Dryden と考えられる Neander は、相対立する諸説の間を縫って対立論を「包括」して行く姿として捉えられている。この姿勢はまさに極端に走らない「中道精神」の現れである。このような態度の背後には、高飛

車の権威、独断的な方法と反対な、率直で片寄らない態度で問題を追及して、その成果については読者にゆだねるその当時の Royal Society の精神であるピュロニズム(pyrrhonism)が見られる。このような Dryden の「中道精神」は彼の文学理論にも見られる。Dryden はギリシャ・ローマとフランスの古典文学理論をいろいろ比較対照しながら、彼なりの「悲劇批評の基礎」(Preface, *The Grounds of Criticism in Tragedy* [1679], *DDPO* I, 238-261)を作り上げて行った。Eliot が「我々は Dryden の理論に…アリストテレスと、初期のイギリスとフランスの実践との間にある … 妥協の理論を見出だす」(*DPDC*, 58-9)と述べたことは、Dryden のこの「包括性」を見抜いてのことであろう。また Dryden は翻訳技術に関して「逐語訳」(metaphrase)と「模倣」(imitation)の中間を行く「意識」(paraphrase)に触れているが(*DDPO* I, 262-273)、Eliot はこのような Dryden の翻訳に「吸収同化する能力とその結果としての幅の広さ」(*SE*, 312)の特質を見出だしている。このように Eliot は Dryden の中にある文字通りの「中道精神」の中に批評の「包括性」を捉えられている。もちろん、その背景には、英国国教会のアングリカニズムの特質となっている「包括性」と見逃すことは出来ない。Dryden の宗教的遍歴を見るなら、彼は Cromwell が亡くなった時は、その死を哀悼する詩を捧げながら、その共和制が崩壊し Charles II がフランスから帰って王位に就くと、その戴冠式を讃える詩を書いた。1686 年には英国国教会からカトリックに改宗し *The Hind and the Panther* (1687)を書いた。このような Dryden の宗教上の豹変は、当時、Milton が王政復古に際してピューリタンとしての節を曲げることなく持続性を保ったことと比べると、Dryden は変節していると言わざるを得ないであろう。このようなことから、*Religio Laici* (1682)は、Dryden の真の国教会の態度を示しているものかどうかでいろいろ議論があったが、この詩は、一方では純粹に合理主義的な神理論、他方では信仰第一主義のカトリック、並びに個人意志中心の清教主義の中間に立つて舵の取り方に苦心していたその当時の英国国教会の事情が縮図として反映されていることだけは事実である。このことに焦点を当てるなら、Dryden がこの「中道精神」の中で、最終的にその当時求めたものは、矛盾の調和に基づいた平和と秩序であった。たとえば、*To His Sacred Majesty* (1661), *Astraea Redux* (1662)において、Dryden は Charles II を David になぞらえて、寛仁の徳を持って政治の衝に当たることを期待している。また、その当時の英国の政治的背景を諷刺した *Absalom and Achitophel* (1681)の根底にある祖国を憂える真剣な熱情では国王こそ国家の絶対必要な柱(public pillars of the State)であるとの David の宣言でこの詩の第一部が終わっている。この安心立命の心境は、ローマ・カトリック改宗後の *The Hind and the Panther*で表明されている(Cf. 村上至孝、『イギリス新古典主義の詩』[研究社、1973], 10. 268)。

しかし、Eliot はこの Dryden の改宗に関して全く触れていない。Eliot は、どちらに傾くこともなく、ただ *Religio Laici* と *The Hind and the Panther* の二つの詩を修辭的文体の立場から見ていただけである(*DPDC*, 16-19)。Eliot の精神的宗教的遍歴からして、Bredvold が唱えるドライデニーピュロニスト説などの議論は、異質のものではなかったはずである。このようなことを考えるなら、Eliot の Dryden 観は、Dryden の詩そのもののよさを追求した Van Doren と、Dryden の背景にある Bredvold 流の宗教思想の中間を行くまさに Eliot 自身の根幹にある「中道精神」にある。Eliot が「感性の分離」の責任を Milton と Dryden に課しながら、その原因を「内乱」に関係付け、これを押し進めて行くと「言葉も観念もきかなくなるような深みに達する」と言ったのは、国内の秩序と平和を求めた Dryden の中に Eliot はその当時のアングリカニズムの危機を感じ取っていたからである。このように Donne、G. Herbert で論じられた Eliot の宗教上の via media は Dryden にあっては、20 世紀の Eliot の批評論に「包括性」という形で表れてくるのである。

注

1. Schuchard, Ronald, *The Varieties of Metaphysical Poetry* (London: Faber and Faber, 1993), 41, 80.
2. More, Paul Elmer, "The Spirit of Anglicanism," *Anglicanism*, Eds. Paul Elmer More and Frank L. Cross (London: S. P. C. K., 1962), xxiii-iv.
3. Richards, I. A., "On TSE: Notes for a Talk at the Institute of Contemporary Arts," *T. S. Eliot: The Man and His Works*, ed Allan Tate (New York: A Delta Book, 1966), 8.
4. Cf. Ransom, J. C., *The New Criticism* (Connecticut: Norfolk, 1941), 135-208, Wilson, E., "Historical Criticism," *Critiques and Essays in Criticism*, ed. Stallman, R. W. (New York: Ronald Press, 1949), 449.
5. Eliot, T. S., *Notes towards the Definition of Culture* (London: Faber and Faber, 1967), 29. ここで述べられている Eliot の「強さの精神である」懷疑主義は Dryden の時代の背景に見られる「弱さのピュロニズム」と一線を引いている。Cf. Bredvold, Louis I., *The Intellectual Milieu of John Dryden* (Ann Arbor: University of Michigan Press, 1965), 16-44. Cf. 村田俊一、『T. S. Eliot のヴィア・メディア』、108-113.

6. 村田俊一、「Donne から G. Herbert へ」、第 78 回大会 *Proceedings* (日本英文学会)、53-55.